

渡辺淳一

冬の花火



# 渡辺淳一 冬の花火

角川書店

冬の<sup>ふゆ</sup>花火<sup>はなび</sup>

昭和五十年十一月二十九日 初版発行

著 者 渡 辺 淳 一

発行者 角 川 春 樹

発行所 株式<sup>かど</sup>会社<sup>かど</sup> 角 川 書 店<sup>しょてん</sup>

東京都千代田区富士見二の十三  
①一〇二 ②東京一九五二〇八  
電話東京 (六六) 七二一 (大代表)

印刷所 暁印刷株式会社

製本所 株式<sup>会社</sup> 宮田製本所

---

Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取替えいたします

0093-872154-0946(0)

冬  
の  
花  
火

裴頓·林  
静一

# 目次

## 序章

第一章 蒼茫

第二章 野火

第三章 幻暈

第四章 喪失

第五章 夕虹

第六章 光彩

第七章 裝飾

第八章 落日

## 終章

あとがき

五

九

七

三

一〇

一五

一六

一七

二二

二七

三〇



## 序章

帯広は札幌から急行で五時間、北海道を縦断する日高山脈の先に<sup>ひろ</sup>拡がる十勝平野のほぼ中程にあたる。私がこの地に、三十一歳で夭折した女流歌人、中城ふみ子のあとを訪ねたのは、秋の早い北国ではすでに落葉の十月の末であった。

その時、帯広の空は中城ふみ子の死の相貌をうつすように蒼く、どこまでも冷えていた。まことにこの北国の空は、高みも知れぬほど晴れ渡り、それゆえに見る者を頼りなく、不安な気持ちにかりたてる。

帯広という街が、その昔、先住民族のアイヌ人によって、オ・ペレペレ・ケプと呼ばれ、そこからオビヒロという呼び名が生まれたことも、その時に知った。

オ・ペレペレ・ケプとは、アイヌ語で川がいくつにも<sup>わだか</sup>岐れているところ、という意味だというが、たしかに帯広には北海道第二の流域面積を誇る十勝川を中心に、札内川、士幌川、利別川などが集まり、これらはやがて十勝川に合して太平洋に注ぐ。

この近くに、「狩勝」とか「鹿追」という地名があるところを見ると、このあたりには鹿が多く、それを追って、先住民族が駆け巡ったのかもしれない。

しかし、いま帯広の街には、百年前の開拓当時を思わせる原野の面影はどこにもない。整然と碁盤<sup>ごばん</sup>縞に区切られた路はまっすぐ延び、その左右には近代的なビルが建ち並んでいる。晴れた空の下、駅前前の広場にはタクシーやバスが並び、駅前通りは人で賑わっている。



この駅へ降り、一步街へ足を踏み入れた時、私は何故ともなく、背中を風が吹き抜けるような冷氣にとらわれた。

もちろん私の行った十月の末は、道東のこの辺りではすでに紅葉も終り、落葉の激しい晩秋であった。そこへ東京から来て、寒いと感じるのは当たり前である。その日、帯広で見た新聞の天気予報の欄にも、東京と帯広の温度の差が、東京十三・一度、帯広三・三度と、十度近い開きがあることが示されていた。

しかし私は道産子である。寒さには慣れているつもりだし、晩秋の帯広の寒さを予測して、あらかじめ下着を重ね、コートも東京では珍しい厚手のものに替えていた。それに前日は札幌に一泊して、寒さへの準備は万全のつもりであった。

それなのに一瞬、戸惑うような冷気を感じたのはどういうわけなのか。いや、それは正しく言えば、体で感じる「寒さ」とは少し違う、むしろ心で感じた冷やかさ、とでも言うべきものかもしれない。これは奇妙な思いであった。体ではさほど寒いと感じていないのに、心のどこかで寒いと感じる。そのような錯覚がなぜ、この街で起きるのであろうか。この街にはそのような錯覚を起こさせるなにかがあるのだろうか。

私はぼんやりそのことを考えながら、駅前からタクシーに乗った。そしてその理由が私なりに納得できたのは、その翌日、駅ビルの上のホテルで目覚め、そこから街の全景を眺めている時であった。

その日も冷たい風が吹いていたが、空は昨日と同様、晴れていた。

駅前からまっすぐ北へ延びる路の両側にはビルや家々の屋根が並び、その先に雪を抱いた日高連峰が望まれる。家の途切れた先は野となり、そこを大きく蛇行した川が流れ、それによってこの街が山とつながっていることが知れた。

だがこの街から遙かな視線をさえぎるものといえは、わずかに十勝連峰のそびえる北の方角だけで、

それさえも遠い空の果てに淡い一線となつて望まれるだけである。少なくともこの街には、丘陵と名付けるほどの起伏はない。あるのはただ、悲しくなるほど晴れた空と、目の届くかぎり拡がっている平原だけである。まことにこの街の空の蒼さには含羞がない。

風は冷たいが晴れすぎている空と、平原のなかの低い街のたたずまいが、一步街へ足を踏み入れた私に、異様に冷え冷えとした思いを抱かせた理由ではなかったのか。

この果てしない空と平原のなかに、浮き燈台のように生まれた街で、私が初めに逢ったのは歌人の舟橋精盛氏であつた。氏は長く帯広に住み、「新墾」「辛夷」「山脈」等の歌誌にかかわり、野原水嶺氏とともに、中城ふみ子の歌に影響を与えた人である。

私は氏を、札幌の歌誌「原始林」の主宰者である中山周三氏の紹介で知ったのだが、氏は肢の不由なのにもかかわらず、かつてふみ子が学んだ女学校や若い恋人と歩いたであろう帯広畜産大学への道を車で案内してくれたあと、十勝大橋に近い中城ふみ子の歌碑に連れていってくれた。

その場所は帯広神社の裏手にあり、前面には、帯広川が流れている。

碑のまわりは雑草にまじつて水蠟が生え、背景には帯広神社境内の白樺、水檜、楓などの樹木が並んでいる。

歌碑は長方形の鉄平石の敷台の上に、長さ一・五メートル、幅三十センチの大理石が置かれ、その右端だけが、乳房を喪つたふみ子の悲しみを現わすかのようにL型に曲がつて短くつきでている。

大理石の中央には仙台石がはめこまれ、その黒地に白く、ふみ子の筆蹟で次の歌が刻まれている。

冬の皺よせある海よ今少し生きて己れの無惨を見むか

十一月、碑は葉を落した裸木を背に、薄の揺れる堤をこえて蒼ざめた空の果てを見詰めている。

この空と地のかぎりない拡がりのなかで、ふみ子が今少し見ようとした己れの無惨とはなんであつたのか、いまから私はその無惨をゆつくりと迎<sup>むか</sup>らねばならない。

## 第一章 蒼茫

1

中城ふみ子（富美子）は大正十一年十一月二十五日、帯広市に生まれたが、その実家は野江家で、ふみ子は昭和十七年四月、二十一歳で嫁ぎ、中城と姓を変えている。

ふみ子の実家はかつて帯広の東一条南六丁目の一角で呉服店をしていたが、いまは市の中心街である広小路に移り、この地では一、二を争う大きな呉服店となっている。この家の主人野江寿一氏はふみ子の妹、野江敦子さんの御主人であり、ふみ子が中城氏と結婚したあと、妹の敦子さんが家に残り養子縁組をしたのである。

敦子さんはふみ子の十歳下で、すでに四十を過ぎているが、見た目はずっと若く、当然のことながら生前の中城ふみ子を髣髴とさせるほどよく似ている。背丈は一五二、三センチでもあろうか、小柄な撫で肩で、上品でおっとりした顔立ちのなかに、柔和な眼がいくらか眩しげである。この眼は、この姉妹にきわだつた特徴で、ふみ子の写真のどれを見ても、気懶げな上臆と長い睫が印象的で、女らしい情感に溢れている。

敦子さんは夕方の忙しい時にもかかわらず、ふみ子の遺していった日記帖や新聞の綴じこみ、写真などを見せてくれたうえ、思い出を控え目に語ってくれた。

この姉妹は、たしかに顔や体つきは似ているが、性格はふみ子の積極性に対して、敦子さんの消極

性と、ちょうど正反対であつたらしい。このことはふみ子が二十一歳で早々と家を出て結婚に踏み切つたのに、敦子さんが家に残り、親に言われるままに家を継いだことから想像できる。

ふみ子は嫁ぐ日、この下の妹に自分の思い出となるさまざまな品を残していった。このなかでも数冊の日記帖と作文ノートは、いまでも懐しいものとして敦子さんの心に残っている。

日記帖には普通の生活記録の他にその時々々の感想が書かれている。なかには新聞の存在意義についてとか、真実の報道とそれによってひき起こされる悲劇についての憤りなど、十代の若い女性とも思えぬ鋭い社会批判が記されている。これに反して作文ノートは若々しい情感に溢れ、一言一句、細かな神経が行き届いている。

敦子さんがこの姉のことでよく思い出すのは、自分の部屋で壁にもたれて本を読んでいた姿で、その時、ふみ子は必ずといっていいほどお菓子をつまんでいた。それがなくなると敦子さんに買いに行かせる。買ってくるとお駄賃にいくつかくれて、あとはまた自分でつまみながら本を読む。

さらに、敦子さんは姉に連れられて街の喫茶店でシュークリームを食べさせてもらった記憶がある。シュークリームなど、いまでは別にどうということもないが、戦後の物資不足のときには随分贅沢で気取った食べものであった。

ふみ子の子供時代の様子は、ふみ子のいまは亡き母、野江きくゑさんの残したアルバムや文章が、最もよく伝えている。

ふみ子は野江家にとっては初めての子供であつたので、両親、祖父母のいつくしみようは大変で、ふみ子はそれらの愛を一身にうけて、かなり我儘な育て方をされたらしい。

彼女が小学校に入学した翌年、次女的美智子が出生し、このため両親の自分への愛が幾分減つたと感じたふみ子は、「美ちゃんどうして死なないの」と言つて親達を驚ろかせたという。後年、死を前にして示した異様な執着心と独占欲は、すでにそのころから芽生えていたのであろうか。とにかく

小さいときから大変なおしゃまで、「大きくなったらなにになるの」と聞かれると、きまつて「お蔵のいっぱいあるお金持のお嫁ちゃんになる」と言つて笑わせた。

ふみ子は小学校では成績はよかったが、急に沢山の友達の間に出されたせいとか、初めのうちはあまり友達を欲しがらず、「いつも木陰でしょんぼりと立つていて、友達と馴染もうとしない」と先生からよく注意を受けたらしい。元気に遊ぶ友達から離れて、このころから一人、感性の世界に遊んでいたのかもしれない。

そのせいか、同級の友達の印象もあまり鮮明ではなく、小学校時代の同級生である鴨川寿美子さんによると、やせっぽちで背が高く美しかった、という以外、これといった思い出は残っていない。

しかし同じ学級の河内都さんは、机が隣り合つていたせいもあつてか、とくに親しく、ふみ子が賢いうえに可愛らしい容姿なので、いつのまにか、彼女がお姫さまのように振舞うのは仕方がないことなのだと思ひこまされていたという。

このころから、ふみ子は部厚い童話や少女小説の本を教室まで持ちこみ、休み時間はもちろん時には授業時間中にもで読み耽るようになった。そのせいか物識りで、勝気な性格も手伝つて腕力もないのによく男の子と喧嘩をし、河内さんはいつもふみ子の楯の役をさせられた。このようにふみ子はちよつと見た目には目立たないおとなしい子であつたが、ごく一部の気を許した友達には我儘で自己中心的な気性を見せていた。

だが彼女らが、ふみ子像として鮮やかに思ひ出せるのは、やはり女学校にすすんでからで、ここではたしかに一風変つた女学生であつた。

女学校へすすんでも、ふみ子は相変らず瘦せていて、そのことから「キューリー嬢」という綽名をつけられていた。前記、鴨川さんの記憶によれば、ふみ子は体操はまったく駄目で、理数科もあまり良くはなかつたが国語作文等は得意であつた。そのため作文をよく先生に朗読され、ふみ子は自分の文

章が読まれるのを、うっとりとした眼差し<sup>まなざし</sup>で見ていた。だが時にその美文調を指摘され、「真実性がない」と批判されたりすると、そういう時、ふみ子は露骨に不機嫌になった。

鴨川さんは先生から文集を返してもらったあと、よくふみ子と小使室の隅や図書室で交換して読みあったが、そのころから、ふみ子の作文は女学生とは思えない、気取った、大人びた書き方だったという。

この二人は女学校時代も背丈がほとんど変わらず、隣り合わせの席に並んでいたが、ふみ子は授業中、よく先生の目を盗んでは詩の書きかけをノート<sup>ノート</sup>の端に書いて渡してよこした。ふみ子にとって講義は退屈そのものであったのか、授業に出ながら頭は絶えず別の空想を思い浮かべていたらしい。

いずれにせよ、ふみ子はガリ勉タイプではなかった。女学校時代も真面目<sup>まじめ</sup>にノートをとったり、先生の話を真剣にきくことはあまりなく、詩や文をつくり、その合い間にノートを取るといった授業態度だったが、それでも結構成績はよかった。

もちろんこれには頭のよさもあるが、かなり要領のよいところもあり、試験の前になると、きまって友人を自宅に呼び寄せ、彼女らのノートを見ながら、試験に出そうなところを話させては理解する。河内さんや鴨川さんはよくこうしてふみ子に呼び出された。

しかしお互い女学生同士、試験とはいえ他人の家で一夜を過ごすのもまた楽しいものに違いない。夜中に疲れて眠くなると、ふみ子は階下から果物や罐詰をこっそり持って来て、その空罐を窓の外の大きな看板のかけに隠して首をすくめてよろこぶ。また家が呉服屋であったところから、当時では珍しかった絹の靴下を店からちよるまかしては友達に与えて人気を集めていた。

さらには不得手<sup>あて</sup>の数学の点数をかせぐために、若い担任の教師にラブレターを送ったこともあった。この効果は見事で、通知簿で「優」をもらい、「先生といっても、男なのよ」と舌を出す。

我儘<sup>いんげん</sup>で悪戯<sup>いたづら</sup>っぽい性格は、すでにこのころははっきりした形をとって現われていた。

性行録では一年の「寡言」が二年目から「多弁」になり、挙動・動怠などの評価が、はじめの「平静、優雅」「規律正」「勤勉」などから「普通」へ下がるように、女学校の学年が上がるにつれ、ふみ子は単なるお利巧さんから派手好きな生徒に変わっていった。

ふみ子の上級生であった浜中千枝さんは、ふみ子が女学校に入ってきた時、「一年生のくせにお化粧をして登校し、少し生意気な感じの子」といった記憶をもっているが、たしかに教師や上級生からはなにを考えているのかわからない、ある意味の注意人物であった。女学校という華やかな場と、感情の発達する年代に達して、それまで息づいていたふみ子の自意識はようやく目覚め、それとともに欲しいものが手に入る呉服店の娘という環境が、ふみ子を一層、派手で早熟な娘に変貌させていったらしい。

この女学校で最も人々の注目をひき、華やかな印象を与えたのは学芸会の舞台であった。ここでふみ子は一年と二年の時は舞踊をした。だがそれらは群舞でソロではなかった。他人より、より華やかに、そして人々の中心になることを望んだふみ子は、三年生になると一人で踊りたいと申し出て断わられた。憤慨したふみ子は、ただちに舞踊を止め、演劇部に移ったが、ここでも自分から主役の座を要求した。

いかにふみ子が美しく多才でも、途中から演劇部に來た者をすぐ主役に拔擢するわけにはいかない。結局この要求もいれられず演劇をあきらめたふみ子は、今度は文芸部に移籍する。こちらのほうは翌四年生の春、文芸部部長に推されてようやく落着いた。

このころから読書はいわゆる乱読であったが、なかでも川端康成の「乙女の港」が中原淳一の絵とともに、「少女の友」に載っているのに熱中し、絵を切抜いてはスクラップにし、しきりに淳一の字体を真似た。ふみ子の、やや右肩上りの男っぽい字体は、このとき身についたもので、その筆跡は遺詠を書いた生原稿まで、終生ほとんど変らなかった。



女学生によくある「S」という関係はここでもさかんで、ふみ子は上級生・下級生、両方から引く手あまたのもてようであった。上級生からは、おきんな可愛い子と思われ、下級生からは奔放な大人びたお姉さまに思われたのである。

これら近付いてくる「姉妹」たちに、ふみ子はやや甘美な美文調の文章を送り、それらによつてさらに周りの者を魅きつけて満足していた。

美しく派手で、それゆえに一部の同級生に反感を買い異分子扱いもされたが、それだけに女学校時代のふみ子にはまたファンも多かった。

野江ふみ子がこの庁立帯広女学校を卒業したのは昭和十四年であった。この年の春、ふみ子は卒業とともにかねての希望どおり東京の家政学院に進学した。両親は家に残つて家事の手伝いでもすることを望んだが、ふみ子は勝手に願書を出して試験を受けてしまった。当時のふみ子にとって帯広はすでに狭く、常識的な人間の目ばかり多過ぎた。もつと自由な東京へ出て新しい世界を見たかったのである。

はじめて大都会に出て、ふみ子の目は好奇心に輝く。

当時、第二次世界大戦こそまだはじまっていなかったが、日本は中国に侵攻を重ね、街は次第にカーキ色の国防色が溢れだしていた。このなかでふみ子は妖精のような小さな体をフレアーのある長いスカートに包み、そのころは派手すぎるといふことで批判されていたバーマネットをかけ、街を闊歩した。半年遅れて上京した河内都が、お化粧をしないでふみ子に逢いに行つて散々に注意され、まる一日、お化粧の講習を受けるはめになったのもこのころである。

家政学院は二年間で終る。学校は名のとおり、「家政」を中心に教えるが、ふみ子が最も興味をもったのは、一般教養として教わつた国文学であった。

このころから、ふみ子のはっきり自分は女流作家になるのだと宣言している。